【解説】

（1）　この回からしばらく宗教の単元が続く（ユダヤ教・キリスト教・イスラム･･･）ので、ひとくちに「宗教」といっても実際には多様な宗教が存在することを、とりあえず２つの分類基準を軸に４つのタイプに分けて説明する。

教室では、生徒達に知っている宗教を答えさせ、それが４タイプのどれに該当するか予想させてみる。正しければそのまま記入すればよいし、もし違っているときには「残念でした、実はね･･･」と言いながら正しい位置に記入する（無理に正解をださせない）。実際にやってみると意外に難しいが、最後には、おおむね「解答例」のような図ができあがるはずである。

※仏教は本来は“無神論”だが、日本の仏教は多神教の性格を強くもっている。

（2）　しかしここで終わりではない。一神教と多神教の違いは、単に「神の数」の違いだけではないのである。「神」という存在に対するイメージも根本的に異なっている。宗教について学ぼうとする際に、この「神」のイメージの違いをしっかり理解しておくことが重要なポイントとなる。なぜなら、私たち日本社会は古くから多神教の影響を強くうけており、大多数の日本人にとって「神」は多神教の神だからである。多神教の神を前提に（そのイメージのままで）一神教を正しく理解することは難しい。

多神教の世界観は、映画『千と千尋の神隠し』に描かれているように、人間の住む世界と神が住む世界は連続しており、人と神は等身大で、容易にコミュニケーションをとることができる。しかし一神教の世界観では、神は人間とはまったく異質の存在であって、その全貌を知ることすらできない。人間は、神が創造した世界の一部に過ぎず、神の定めに逆らうことは不可能である。

この違いは、例えば「合格祈願」の際に現れる。多神教の人間は、自分が進学したい学校に合格するために祈願する。しかしこれは少し見方を変えれば、神を“買収”するようなものである。なぜなら、自分の願いを叶えてもらうために、賽銭を投じて神を自分の味方につけようというに等しいのだから（神強制）。

一神教ではこのような合格祈願はありえない。神が自分にどのような人生を用意しているかを知ることはできないからである。それは神のみが決めることであって、自分にその決定権はない。それゆえ合格祈願は、あくまでも神の定めに従うことを前提に、その行く末が自分に過大な苦痛をもたらすものでないことを、ささやかに願うに過ぎない。

神に対するこのような姿勢の違いを踏まえたうえで、ユダヤ教の学習に入っていく。